



桜咲く



葉瀬 彩

オープンかクローズか

昔は、というより学生の頃はなんとなく一つの会社に就職して、その会社が自分の中で常識となり一生を終えていくんだろうな、という感覚がずっとあった。

誰でもそうなんじゃないだろうか。

けれど結局は大方なんだかんだいって理由をこじつけて

ああ、思ったとおりの道筋じゃないか。

で終わる。

それが良いか悪いかなんてその人の生き様なのだから口出ししようがない。

けれど誰もが疑問を抱きつつ、最大公約数的な考えに帰結するのではないだろうか。

ちょっとしたはみ出しもの。

グラフでいうところの線上にのらなかつたプロットだ。

独特な存在感を放っているけども、決して線上にのることはない。

むしろ公約数の中では誤差扱いを受ける。

そこで、誰かが指摘しようものなら「ああ、これはね...」で厄介者として認定される。

その子だけ別のグラフへ行けばいいんじゃないかと誰もが考え始める。

そこへ行けば君もそこへ近づけるよと。

もしかして、もしかして、線上に乗らなかつた子達が似たようなプロットだけを集めてグラフを作ったとしたらどうなるだろう。

A. 最早グラフとして成り立たない。

忘れたのだろうか。

はみ出しものの君は、そこではとても大きな意味があるということ。

君がいるだけで全ての意味づけができてしまうんだ。

だから一概にすぐ外に目を向ける必要はなくて、まずは自分という位置というか意味づけを知ってから行動しても悪くはないんじゃない。